

体育

Physical Education

「対話的な学び」を具現する授業デザイン例

福島県教育庁相双教育事務所



▶ 学年 小学校 第5学年及び6学年

▶ 単元 陸上運動（短距離走・リレー）

POINT
01

対話的な学びを引き出す教師の仕掛け

本単元のリレーは、一定の距離を走り、ペアの相手にバトンをつなぐための自己や仲間の課題を見付ける活動を通して、自分の意見を伝えたり仲間の意見を聞いたりして練習の方法を工夫し、課題解決することをねらいの一つとしている。

本時の後半では、それまで同じだったペアの相手を替える。ペアが替わったことでうまくいかないところがあることに気づき、これが新たな課題となる。子どもたちは対話を通して、体育の見方・考え方を働かせながらペアと協働で課題を解決しようと新たに学び始める。

POINT
02

対話的な学びの様子

◎ 新しい相手とペア学習で課題を解決する。

※場面設定は40m、テイクオーバーゾーンは10mとした。

教師「ペアの相手を替えてバトンをスムーズにつなげられるかやってみよう。」

児童A「うまくつながるかな？」

児童B「スタートマーク（以下マークとする）の位置は同じでもいいのかな。」

児童C「もっとスピードに乗ったバトンの受け渡しがしたいな。」

〈児童Bと児童Cのペア〉

児童C「BさんはAさんとペアの時、何歩にマークしたの？」

児童B「Aさんとは10歩だったけど、何歩にしようか。」

児童C「じゃあ同じ10歩から合わせていこうよ。マークまできたらBさんは思い切り助走していいよ。」

児童C「バトンを渡す時にBさんが近すぎてスピードを落としちゃったな。Bさんの助走がゆっくりだからもっとスピードに乗らないとバトンを渡しにくいな。」（※図1）

（タブレットPCで撮影したバトンパスの動画を確認しながら）

「姿勢も少し前傾になるといいと思うよ。」（※図2）

児童B「オーバーゾーンが心配で、思い切りスタートできないんだ。どうすればスピードに乗ったバトンパスができるのかな。」

（教師は、子どもたちが課題解決に向けて思考する姿を見取る。）

児童C「歩数を少なくしたらどうだろう。マークを8歩に近づけたらオーバーゾーンの心配も小さくなるから思い切り助走できるんじゃないかな。」

児童B「なるほど。マークまでの距離が短いから安心して助走できそうだよ。思い切り助走できればスピードに乗ったバトンパスができるね。」

児童C「助走のスタートがしやすいように、マークまでいったら『ゴー！』って声もかけるね。」

教師「オーバーゾーンを心配しないで思い切り助走しやすいように、マークまでの歩数を少なくしたのですね。」

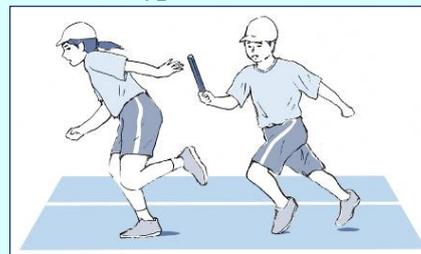


図1 近すぎてスピードが落ちてしまう

—『授業者の視点』—C、N

（相双教育アピールより）

実際の経験によって身に付けた知識・技能を活用しながら、協働して解決する課題を設定することで、児童の活動への必要感を引き出す。



図2 ICTを活用して対話する姿

POINT
03

学びが深まった児童の姿

ペアの相手が替わったことで児童たちはバトンの受け渡しでどこを工夫すればいいのか考えだす。走り出すタイミングや声かけ、バトンを受ける手の位置や高さ、バトンを受け渡す際の互いの走るスピードなど、対話を通してそれらのことに気付くことで「リレー」の技術は高まっていく。何より相手と心をつなげて取り組まなければよりよくなるということもわかってくる。

この授業では、対話を通して児童Cが児童Bの困り感に寄り添いながら、互いに協働して学ぶ姿が見られた。このように、それまでの学習から自分の考えを伝えたり、相手の考えを共感的に聞いたりする活動を通して、新たな発見が生まれ、児童の思考は広がりさらに学びを深めていく。教師は、学習カードやICTなどを活用しながら子どものその取組をよく見取ることが大切である。